

渡邊構成員コメント資料

農林水産省の施策について

■ねらい

1. ゲノムベースでの新規技術開発において、欧米や中国との競争に勝てる分野の見きわめはいかがでしょうか？
2. 個別のマーカ一等の開発や精度が高くなってきていても、育種のなかでシステムとしてどのように組み込むかの体系化の検討はMAFF側でおこなわないのでしょうか？ 効率やコスト及びパッケージとして個々の小さな育種現場での利用等の応用部分の繋がりは地域個別の異なる需要への対応としての貢献として必要かと存じます。
3. 実需者のニーズからのフィードバックに基づく、育種になりますが、数が沢山有るだけではマーカも十分にいかされません。異なるカテゴリーの情報の統合とマーカ選択等の流れを検討頂ければと存じます。

■ 研究内容

作物の選択が総花的です。地域振興に関わるなら地域ごとの作物や形質のターゲット等を具体的にしていきたい。

遺伝子組み換えについては、国産LMOsはほとんど商品化されていません。商品化するための理解や需要が先立たないと折角の研究開発が死蔵される可能性が大きいのではと存じます。世界状況を考えると、LMOについては技術開発より、世界のLMO-FFPの栽培利用状況と日本の食料事情の啓蒙がさらに必要かと存じます。

遺伝資源そのものの確保がないと有用形質の開拓ができません。多様な国際法のもとの遺伝資源の権利の確保について、国内在来地域遺伝資源の確保と開拓等の観点も必要かと存じます。4ページで、⑨遺伝資源から多様な地域特性や経営戦略に即した有用遺伝子を効率的に特定する技術の開発 でこれらに対応しているのかあるいは、⑫遺伝資源の効率的な保存技術の開発 で対応できるのか説明いただきたい。

■ 期待される成果

育種期間が短縮されても種苗の生産がないと栽培はできません。平行して、優良種苗の短期大量生産等の事項も考慮も必要です。

文部科学省の施策について

○2ページ

まずは、情報尾上流での異なる組織で管理しておりかつ異質のカテゴリのデータベースの統合が迅速に必要である事や利便性を高めることは研究ユーザーに役立ちます。一方、MAFFでの地域現場での実需者のニーズに応じた全く異なる情報との将来的な対応も必要かと存じます。

○4ページ

植物の機能解明や根幹的な天然資源の枯渇に対応できる適応性を迅速に高める機能解明は、重要です。一方、これがわかれば育種に使えるだろうではなく、MAFFとの強いインターフェースが機能研究でも必要かと存じます。チャンピオンデータが果たして、農業に役立つか可能性の域を越えて実証の体制の可視化も検討頂ければと存じます。既存の大学等の施設利用連携で、小規模栽培試験等ほ場での試験により、これら知見が実証されるような枠組みを検討いただきたい。